大好き

春月桜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
大好き

【Ｎコード】
Ｎ６５０５Ｇ

【作者名】
春月桜

【あらすじ】
杏には彼氏がいる。大好きと思っている彼氏。杏には男の幼馴染の剣がいる剣はその思いを…

大好き1

大好き

1、カレカノやってます！！

私は道妃姿（みちひさ）　杏（あん）。

高ニのごく普通の女子学生。

私にはすごい大好きな彼氏がいます。

その彼氏の名前は由梨本（ゆりもと）　啓太（けいた）君。

この彼氏は男女問わず人気者。

そして、私の大好きな彼氏。

今は、超青春真っ最中。

この楽しさがいつまでも、続いてほしいと願ってた…。

・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・

「送れちゃうー！！！何で携帯のアラームこんなに遅いのよー！！」

私は走りながら独り言を怒鳴っていた。

「遅れるぞー！！！」

私の隣を自転車で抜かしながら、一人の男が言い放った。

この男は私の隣に住んでいる幼馴染の千里（せんり）　剣（けん）。

私は小さい頃はこいつのことが好きだった。

でも、今は彼氏がいるから諦めたけどね。

「うるさいなー！！あんたは自転車だからでしょー！！」

私は剣に怒りながら怒鳴った。

「じゃあ、何でお前自転車で来なかったんだよ！！」

剣はだるそうに私に言い放ってきた。

「しょうがないでしょ！！！」

「何がだよ。」

（だって、自転車で行ったら啓太君に持たせちゃって帰り道、手を繋いで帰れないんだもの。）

私は心の中でむくれた。

「早くしないと遅れるよ？」

剣は白い目で見ながら言い放ってきた。

「じゃあ、乗せてけー！！！！」

私は大声で怒鳴った。

「もうついた。」

剣は自転車を止めながら言い放った。

「えー！！！また走らされた。」

私はむくれながら言い放った。

「歩きでくるからいけないんだろう？」

剣はちょっと怒りながら言い放った。

「うるさい。」

私は剣にそう言い残して教室に向かった。

・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・

剣

俺はあいつのことが好きだ。

でも、言えるわけない。

だって、あいつは彼氏がいるし、いなくてもふられることは決まってることだから。

俺は今、無性に苦しい。

大好きな人が他の男のものだから。

あいつの彼氏とは俺は正反対だから、きっと俺はただの幼馴染にしかならない。

男とは見ていないんだろうな？

なあ、気づいてくれよ。

・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・

ガラッ

私は教室に入った。

「あ、杏だー！！おはよう。」

この子は私の仲がいい友達の天風（あまかぜ）　逸美（いつみ）。

「おはよう。逸美。相変わらず元気だね。」

私は逸美に呆れながら言い放った。

いつもと同じ風景。

いつも楽しいよ。

だって、彼氏がいるんだもの。

なのに…何か足りないんだ。

「おはよう。杏。」

啓太君が私にさわやかにあいさつをしてきてくれた。

「おはよう。啓太君。」

私は笑顔で言い放った。

何にも変わらない愛しい、啓太君。

なのに、私は胸が苦しくなる。

「近寄るなこのさわやかボーイめー、私の杏だぞー！！」

逸美は私を抱きしめながらむくれた。

「俺の彼女だー！！お前のじゃないー。」

啓太君は逸美に舌を出しながら意地悪そうに言い放った。

「二人とも朝から元気だね？」

私は苦笑いしながらつぶやいた。

「まあね。杏に逢えたから。」

啓太君はこういう言葉がすごく上手でいつも甘い言葉をかけてくれる。

すごく好きなのに、大好きなのに。

私は何か違うんだ。

ねえ、誰か教えてよ。

・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・

2、帰り道

「今日はこれで終わりー。みんな気をつけて帰れよー。」

先生がみんなに呼びかけ、教室は部活と帰る人で賑わう。

「帰ろう。杏。」

啓太君が私に笑顔で誘ってきた。

「うん。」

私はいつものように答える。

・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・

スタ…スタ…スタ…

ゆっくり歩く帰り道。

啓太君は私の歩幅に合わせて、歩いてくれている。

きっと、私のこと好きでいてくれるからこそしてくれることなんだよね？

ねえ、何が私をこうさせてるの？

ねえ、私は何でこの人のことを拒んでいるの？

わかんないよ。

ギュッ

啓太君が私の手を握ってきた。

ちょっと照れながら。

(可愛い。)

私は心の中でそう考えた。

ねぇ、私、何がつっかかってるのかな？

・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・

剣

俺は今、帰ってる途中。

何で、俺一人なんだろう？

小学校、中学校、高一。

全部行きも帰りも一緒だった、あいつがいねぇのかな？

いつも隣にいたのって俺なのに。

なあ、何でお前はあんなやつ選んだんだよ。

なあ、応えろよ杏。

俺はいつもむしゃくしゃする。

あんな弱そうな男と楽しそうに話している杏を見ると。

イライラする。

俺はお前の隣にいちゃいけないのか？

・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・

ガチャッ・バタン…

「ただいま。」

私は小声で言い放った。

「だから、なんでいつもこんななのよ！！！」

リビングからお母さんの怒鳴り声が聞こえてくる。

「お前だっていつもそうだろう！！！」

お父さんも言い返してるみたい。

いつもそう。

学校だけが楽しくいられる居場所なんだ。

ガチャッ

「あ、おかえり。杏。」

お母さんは苦笑いしながら、私につぶやいた。

「ただいま。」

タッ・タッ・タッ…

ガチャッ・バタン

私は自分の部屋にすぐに入った。

私は静かに携帯を見た。

メールの受信ボックスにメールが一件あった。

ーーー剣ーーー

ーーー俺の部屋見てーーー

どういう意味？

私はカーテンを開き、そっと覗いた。

剣が窓越しに私を見つめていた。

ガラッ

私は窓を開けた。

剣も開けてくれた。

「何？」

私は剣に呆れながら言い放った。

「こっち来て。」

剣はそう言いながら私に手を差し伸べた。

「また？」

私はいつもそうやって剣の部屋に行く。

「うん。早く。」

剣は優しく言い放った。

剣、かっこよくなったなー。

私はそう思いながら剣の手を握りながら剣の部屋に飛び移った。

ポンッ

私はいつものように剣のベットに腰を落とした。

「また、おばさん達喧嘩してんだろう？」

剣は呆れながら、尋ねてきた。

「うん。まあね。」

私はちょっと落ち込みながらつぶやいた。

「そっか。寂しくなったら俺を呼べよ。ま、俺より彼氏を呼ぶだろうけど。」

剣はちょっと寂しそうにつぶやいた。

「剣？」

私は剣を呼んだ。

「何？」

剣は笑顔で私に尋ねてきた。

「熱あるの？それとも具合悪いの？」

私は剣の額に手をあて尋ねた。

「何で？」

剣はちょと怒りながら言い放った。

「だって…いつもよりすごい優しいんだもん。」

私は剣の目をそらしながらつぶやいた。

なんだろう。

すごい剣が愛しい。

きっと今私は顔赤いんだろうな。

顔が熱い。

「お前が困っときは助けてやるよ。」

剣は私を頬をつねりながら言い放った。

その顔、反則だよ。

私は剣に見とれてしまった。

「何、見とれてんだよ。」

剣が私に意地悪そうに言い放った。

「み、見とれてないよ！！」

私は図星をさされながら言葉を繋げた。

「バーカ。」

剣は舌を出しながら笑った。

「あんたのほうがバカでしょ！！！」

私はいつものように剣に怒鳴った。

ねぇ、私、気持ちがわからないよ。

・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・

翌日…

「いってきまーす。」

私はいつもより早めに家を出た。

何で？って？

早く起きちゃったから。

・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・

学校につく。

多数しか来ていない学校というのはなんか物足りないような気がする。

私は啓太君が好き…なはずなのに…なのに。

何でかな？啓太君に対する気持ちが足りない。

私が啓太君と付き合ったのは、ちょうど進級したとき。

私が始業式が終わって、帰る途中に啓太君に告白されたから。

啓太君は私のことを好きでいてくれてるんだろうけど。

私はわからない。

何で、啓太君と付き合ったんだろう？

何で？

ガラッ

いきなり、教室の扉が開いた。
「誰がいるのかと思ったら、お前だったのか。」
入って来たのは、剣だった。
「まあね。何で今日はそんなに早いの？」
私は意地悪な顔をして尋ねた。
「お前もだろう？」
「私は早く起きちゃったから。」
「俺も。」
会話終了？
つまんない。
私はちょっと落ち込んだ。
私達はその後、沈黙が流れていた。
「お前ってさー彼氏のこと、本当に好き？」
いきなり剣は窓を眺めながら尋ねてきた。
「な、何でそんなことあんたなんかに言わなきゃならないのよ！！」

私は無意識に声を張り上げていた。
「何でそんなに怒るの？」
剣は冷静に私にまた尋ねてきた。
「別に…。」
私は目をそらしながらつぶやいた。
「図星だな。俺って本当にかんがさえてるよ。」
剣は私の心を知っているかのようにいばった。
でも、本当にあたってるのがむかつく。
「私…考えてたの。」
私は落ち込みながらつぶやいた。
「何を？」
「本当に好きなのかって。」
「だろ？」
「剣はずるいよ。」
「は？」

「剣はずるいよ！！！！！」

ガラッ

私は勢いよく教室を飛び出した。

「おい！！！」

剣が呼んだことなんかどうだっていい。

私こんなに自分のことがわかんないんだ。

私は一人涙の雫を拭った。

・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・

剣

「何であんなこと言ったんだろう？」

俺は一人落ち込んでいた。

ダサいなー俺。

自分で言って後悔するなんて。

本当にバカだ。

何であいつのことを好きなんだろう。

ガンッ

俺はコンクリートの壁を思いっきり殴った。

手がじんじんと痛む。

なあ、どうしてお前は俺のことを好きにならないんだよ!!

・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・

3、本当の気持ち

教室…

剣

今日はあいつとは一回も話せないでいる。

何でか?って?

決まってるだろう。

あいつが完全に無視するからだよ。

俺が話そうとしようとしたらさけるんだよ!!!

「何で、君のことさけてるのかわる?」

いきなり杏の彼氏が満足そうな顔をして俺に尋ねてきた。

「は？何でお前に言われなきゃなんねぇんだよ。」

俺は怒りながら言い放った。

「何でか教えてあげるよ。お前のことが嫌いだからだよ。」

杏の彼氏は笑いながら言い放ってきた。

そのときだった。

俺は後に後悔した。

・・・

大好き2

3、本当の気持ち

ガンッ！！！！

思いっきり嫌な音が教室中に響く。

私が目にした光景はこの場から逃げ出したくなるほど怖いと感じるものだった。

「啓太君！！！！」

私は口の中が切れて血を流しながら倒れている啓太君に寄り添った。

「え？」

「何あれ？」

「何が起こったの？」

次々にこそこそとざわめきが起こった。

キッ

私は剣を睨んだ。

「最低。」

私は潤んだ瞳で剣を睨みながらつぶやいた。

本当はこんな目したくなかったよ。

「……。」

剣は拳を握りながら黙っていた。

「とりあえず保健室に行こう。啓太君。」

私は啓太君にささやいた。

わからない気持ちを抱えながら。

「うん。」

啓太君は殴られたほうの頬をおさえながら頷いた。

ガラッ

私は啓太君と教室を出て保健室に向かった。

・・・

何であんなやつにそこまで嫉妬する？

ありえねぇー。

かっこわる。

俺はそんなことばかり考えていた。

「ねぇ、何で啓太のこと殴ったの？」

いきなり杏の仲が良い天風に尋ねられた。

「何でお前なんかに言わなきゃいけないんだよ。」

俺は目をそらしながら怒り、言い放った。

「私は杏の親友としてきく権利があるの！！！」

天風はない胸を張りながらいばった。

「ふっ。バカじゃねぇの？」

俺は天風に鼻で笑いながらバカにした。

「どーせ、杏のことでしょ。」

天風は呆れながらつぶやいた。

「どうして。」

俺は驚き顔でつぶやいた。

「わかるよ。ずっと見てたんだもん。私、あんたのことが好きだから。わかるの。あんたが杏のことを好きってことが。苦しくて見てられないよ。」

天風は俺を真剣に見つめながら言い放った。

「は？」

俺は驚きを隠しきれず驚いていた。

「何で、杏なのよ。」

天風は切なそうな顔を残して教室を出て行った。

「俺が聞きたいよ。」

俺は頭をおさえながら考えた。

どうしてうまくいかないんだろう？

・・・

「はい。ありがとうございました。」

啓太君と私はお礼を言って保健室を出た。

「大丈夫？」

私は啓太君の顔を覗き込みながら尋ねた。

「うーん。杏が俺にキスしてくれたら治るかな？」

啓太君は私に顔を近づきながら言い放った。

「ちょっ、元気なんじゃん。」

私は啓太君の顔から遠ざかりながらつぶやいた。

「あは、ばれた？ごめんねー。」

（軽いな。）

今、私何考えた？

今、変なこと考えたよね。

何で？

啓太君だよ？

何でだろう。

今、啓太君のこと気持ち悪いって思っちゃった。

どうしよう。

啓太君からどんどん気持ちが遠ざかる。

ねぇ、やだよ。

誰か。

助けて。

・・・

啓太君は相変わらず能天気。

だって、私の事情なんて知らないもの。

「うん。」

と、応えてしまうのが現実。

スタ・スタ・スタ・スタ・スタ・スタ…

私達は歩く。

歩幅をあわせて。

ねぇ、啓太君本当に私のこと好き？

聞いたら、ちゃんと言ってくれる？

でも、ごめん。

もう耐えられないかもしれない。

「今日さ、どっかよっていかない？」

啓太君がいきなり尋ねてきた。

「え？」

「だめ？」

「…い、いいよ。」

私はびっくりしながら応えてしまった。

後に後悔することを余地もせずに。

・・・

「お前は元々このために付き合ったんだよ。まったく、苦労させるよな？お前って。」

啓太君は今までに見たこと無い顔をしながら言い放った。

「じゃあ、騙して…」

私は力が抜けかけながらぼやいた。

頬を伝う涙。

なんて冷たいんだろう。

体は冷え切って震えが止まらない。

怖い。

「当たり前だろう。お前なんかそうじゃなきゃ付き合わねぇよ。」

啓太君は不気味に笑みをこぼしながら言い放った。

「最低。」

私は叫ぶ気にもなれなかった。

最低。

誰か助けて。

この闇の世界から。

私を救って。

その時だった。

「そいつに触れんじゃねぇ！！！！！！！」

聞き覚えのある声が聞こえてきた。

ガンッ

聞き覚えのある声をしている人は啓太君をいきなり殴った。

「そういうこったろうと思ったよ。お前ここら辺じゃ有名だもんな？性格の悪さで。」

聞き覚えのある声はやっぱり剣だった。

息を切らせながら怖い顔をしている。

何で？

何で剣はそこまでしてくれるの？

「ちっ、またお前かよ。お前に二発も殴られるとはな。今日は最悪の日だな。」

啓太君は呆れながら言い放ってきた。

「どっちが最悪だよ。」

剣は啓太君を睨みながら言い放った。

「じゃ、いいや。今日は。また明日ね。杏。」

啓太君の笑みは悪の色に染まっていた。

怖い。

「もう、別れる。」

私は泣きながら震える声でつぶやいた。

「そっか。残念。もう少しでできそうだったのに。まあ、いいよ。お前の他なんていっぱいいるからね。んじゃ、バイバイ。」

啓太君はそう言い残して、公園から足早に出て行った。

ギュッ

「大丈夫か？」

剣は優しく、強く私のことを抱きしめてくれた。

「どうして？剣はずるいよ。」

私は剣の胸に顔を埋めながらぼやいた。

「何が？」

剣は私を抱きしめながら尋ねた。

「どうして私の助けてほしいときにいつも隣にいるのよ。」

私は剣の背中に手を回しながらぼやいた。

「いつもお前をみてるからに決まってるじゃん。」

「みてる？」

「そう。好きなんだ。お前のこと。小さい頃からずっと。」

「え？」

私は思わず顔をあげたとき…

私の唇に剣の唇が重なった。

・・・

大好き3

4、友情と恋のわな

翌日…

どんな顔で剣に会えばいいの？

私は朝からこんなことばかり考えていた。

目の前には、毎日の学校が胸をはって建っている。

いつもなら普通に見えるのに。

きっと、昨日のことでこう見えるんだな。

私は一人で考えていた。

「おばさん邪魔。」

後ろから聞き覚えのある声がいきなり聞こえてきた。

「……。」

私はびっくりした。

そう、目を細めながらだるそうにいつもの意地悪な剣が立っていたから。

私はみるみる内に顔が熱くなった。

きっと、今顔真っ赤だ。

恥ずかしいー。

「はやくどいて。」

剣は顔一つ変えずに言い放った。

何か変。

どこか違う。

「どけよ。」

剣？

何かおかしいよ？

「おい、聞いてんのか？」

ねぇ、お願い。

「おい…。」

剣。

剣のままでいて。

バタッ

その途端、私は不意に意識が遠のいて、冷たい地面に倒れた。

・・・

私は剣に涙目になりながら尋ねた。

手が何故か震えた。

「は？怒るわけないじゃん。何で？」

剣は動揺しながら尋ねてきた。

「いや…何か…いつもと違う…感じがしたから…。」

私は戸惑いながら途切れ途切れにつぶやいた。

目を逸らしてしまった。

「ふーん。何にも変わってねぇよ？」

剣は微笑みながら言い放った。

剣はいつでもそうだよね。

私をどんどん魅了していく。

剣のその微笑に、声に、優しさに。

すべてに、剣に吸い込まれそうになる。

「剣…」

ガラッ

シャッ

剣がいきなり保健室の白い扉が開いた途端、カーテンを閉めた。

（何で閉めたの？）

私は動揺しながら心の中で尋ねた。

「ねぇ、千里。私と付き合ってよ。」

聞き覚えのある声だった。

絶対、知ってる。

ねぇ、お願い。

私の友達じゃありませんように。

「何で俺がここにいるってことわかったんだよ？天風。」

やっぱり。

願いなんて叶わないんだ。

神なんて存在しないんだ。

知りたくない。

現実なんて知りたくない。

もう、これ以上傷つきたくない。

「あんたのことが好きだからに決まってんじゃん。」

ほらね。

現実はつらいんだ。

もう、ここにいられない。

シャッ

タタタタタタ…

私は保健室を飛び出した。

もう、傷つきたくないから。

廊下は秋風で寒くなっていた。

足の裏が痛くなるほど廊下の床は冷えていて。

頬を伝う涙も冷たくて、余計に体を震わせる。

切ない。

苦しい。

こんな気持ち無ければいいのに。

気持ちなんて無ければこんな気持ちしなくてすんだのに。

「おい。はぁ、はぁ…。」

後ろから聞き覚えのある声がする。

この声ですぐわかるよ。

小さい頃からずっと知ってるもの。

ずっと、聞いてきたもの。

剣。

「何で、おいかけてきたのよ。」

私は泣いてることが気づかれないように声を抑えながらつぶやいた。

「お前のことが好きだからだよ。」

剣はすんなり言葉にした。

剣の口から一回も聞いたこと無い言葉。

「こんなときにやめてよ。冗談言うの。そうやってからかってるだけなんでしょ？」

ほらね。

やっぱり。

いつもそうよ。

そうやって、私を乱していく。

私は剣のほうを向きながら尋ねた。

「からかうわけねぇじゃん。」

剣は真剣な目をして言い放った。

「どうして、今そんなこと言えるの??!!どうしてよ。」

私は泣きながら、怒鳴った。

「俺は…お前のすべてを見てきた。お前が笑ってるところも、泣いてるところも、怒ってるところも、全部見てきた。俺はお前の全部が好きだから。」

剣でも、こんなこと言えるようになったんだ。

成長したんだね。

でも、今言われたら…

「俺じゃ、だめなのかよ?お前を支えられないのかよ?」

剣は私のことを見つめながら切なそうに尋ねてきた。

きっと、剣はもっと苦しいよね。

ごめんね。

「私は…」

「やっと見つけた！！」

ガバッ

私が言いかけたときに逸美が剣に飛びついた。

友達だと思ってたよ。

「ば、お前離れろ！！！」

剣は逃げようとしても逃げられない状態になっていた。

「無理。で？杏は何を言おうと思ったの？当然、気持ちを伝えようと思ったんだよね？」

剣の顔の横から顔を出し、逸美は微笑みながら尋ねてきた。

「え？」

「でしょ？」

逸美は勝ったかのような表情をしながら尋ねてきた。

「ほら、言いたいことは言わなきゃ。」

逸美がせかす度に私の心臓が大きく脈を打つ。

いつもこうだよね。

私って。

私は歯をくいしばりながら…

「……好きじゃない。」

私はこうつぶやいてしまった。

最低だ。

こんなことになるなんて。

逸美が笑った。

ああ、わかった。

逸美が私に仲良くしてたのって、この為だったんだ。

私は泣きながら、その場所を離れた。

どれだけ、思っても。

どれだけ、好きになっても。

もう、何もできない。

私は一日中泣いていた。

学校もいかずに。

ねぇ、誰か。

私を救って。

・・・

ありえねぇー。

「お前、あいつにこんなこと言わせるために近づいたんだろう？」

俺は天風を睨みながら言い放った。

声が少し震えた。

ああー。

ヤバイ。

今にも怒りの何かが出そうだ。

「そうだったら何？」

天風は笑いながら言い放った。

目が輝いていた。

「最悪。」

ガタッ

俺は天風にそういい残して、教室から出た。

怒りが込み上げてしょうがない。

腹が立ちすぎて何も考えられない。

授業なんてかったるい。

本当はこんな高校に通いたくなかった。

→テスト必ず一位

俺の目当ては杏だけ。

何をするにも、あいつだった。

なのに、全部意味が無くなった。

俺は道をゆっくり歩いていた。

もう、学校(ここ)にいる意味なんて無いな。

俺はそうやって、道を歩いていた。

いつもはあまり歩かない道。

そして、一番逢いたくない人に逢ってしまった。

「はぁ、何で泣きながらここに居るんだよ。」

俺は呆れながらそいつに声をかけた。

いつもそう。

あいつが泣いてるときは俺も落ち込んでる。

でも、あいつの涙を今拭ってやれるのは、俺だけしかいない。

「だって…。」

俺はこいつの泣いてる顔が苦手だ。

手が震える。

苦しいのはこっちなのに。

「あんなこと言って学校になんて居れるわけないじゃん。」

泣きがら叫ぶこいつを見ると胸が締め付けられる。

ごめんって何故か言いそうになる。

「杏。俺のこと嫌いか？」

俺は優しく尋ねる。

杏は泣きながら、首を横にふった。

やっぱりな。

「じゃあ、何で、あんなこと言ったんだよ。」

俺はため息まじりに呆れた。

あんなに傷ついたの初めてだ。

「っ、だって、言えるわけないじゃない。せかすんだもの。」

杏は息がちゃんとできないまま、途切れ途切れにつぶやいた。

「だからって、今すぐ気持ちを言えなんて言ってないんだから。言わなくてもよかったよ。」

俺はそう言って、杏のことを優しく抱きしめた。

少し震えている手で涙を拭いながら。

「剣。ごめんね。」

杏は泣きながらつぶやいた。

「大丈夫。言えるときがきたら言ってくれればいいから。それまで待ってるから。ゆっくりでいいから。」

俺は優しくささいた。

杏はゆっくり頷いた。

・・・

・・・

大好き４

5、誤解

「杏。おはよう。」

いきなり声がして、振り返ったら逸美が不気味に笑みを浮かべながら立っていた。

何でこんなときに…

私は顔を引きつった。

「お…おはよ。」

私は目をそらしながらつぶやいた。

いやだなー。

「ねぇ、杏は千里のこと好きじゃないんだよね？」

逸美は笑みを浮かべながら尋ねてきた。

またか。

結局剣のことを諦めないんだ。

「う…うん。」

私はどうしてこんな意気地が無いんだろう。

私はつくづく思う。

意気地なしだと。

ちゃんと言えばいいじゃない。

「じゃあ、何で公園で抱き合ってたの？」

逸美はいきなり顔を変え、怖い顔になった。

目は鋭く光り。

声は低くなった。

「え、それは…」

私が言おうとしたら…

「それを世の中ではたらしっていうだよ？そんなことするのって、千里を好きな人に失礼なんじゃない？」

逸美は私を睨みながら言い放った。

冷たい声。

怖い顔。

「杏がそんな人なんて思わなかった。」

逸美は警戒の目で私を見つめながら言い放った。

勝手に決め付けないでよ。

「ちょっ…」

私の話も聞こうとせずに逸美は行ってしまった。

私は怒り半分、悲しみ半分の気持ちを抱えながらトボトボ重たい足を動かした。

これから、どうなるんだろう。

私は不安になりながら歩き続けた。

・・・

から。

ある意味、私には嬉しいことでもあった。

でも、剣のことが誤解されたままだと、困る。

もし、それで私が剣のことを好きって言ったら、どうなることやら。

私…どうしたらいいんだろう。

・・・

私はそのほうに振り返った。

私のことをいつもわかってくれる人。

「一緒に帰ろうぜ。」

その男はいつもと同じ顔の優しい剣だった。

剣は顔色一つ変わってなかった。

剣の言葉が体に染み込んで心があたたかくなったような気がした。

「え？」

私は驚きながら顔をしかめた。

あまりにも言葉が染みてきて驚きが抑えられなかった。

「え、いいけど。」

私は答えてしまった。

後で、後悔した。

こんなことしなきゃよかったと。

・・・

翌日…

私は学校についた。

逸美と何人かの女子が怖い顔をしながら寄ってきた。

「好きじゃねぇ男に手出してんじゃねぇよ！！！」

いきなり一人の女子が私の頬を叩いてきた。

「いやっ！！！」

ガシッ

私が叫んでも頬にあたるものは一つも無かった。

何で？

「？」

私は閉じていた目をゆっくり開けた。

その目に映ったのは女子の手首を掴んでいる、剣の凛々しい背中だった。

そのとき思った。

いつでも傍にいてくれたんだ。

「俺がこいつを勝手に好きなだけなんだよ！！！何で、こいつが責

められなきゃいけねぇんだよ！！！」

剣は怖い顔をしながら叫んだ。

剣。

「だ、だって…千里君に。」

一人の女子はタジタジになりながらぼやいていた。

目を逸らしながら。

「こう仕向けたのはお前だろ？天風。」

剣はものすごい怖い顔をしながら逸美に尋ねた。

声がかなり低くて何か圧力を感じた。

「そうだったら何？」

逸美は不気味な笑みを浮かべながらささやいた。

首を傾げながらえらそうに登場してきた。

目が笑ってなかった。

「友達を道具にするってお前、最低な奴だな？」

剣は眉間にしわを寄せ逸美を睨んだ。

「そうかしら、友達は使うためにあるものなんじゃないの？」

鳥肌が立った。

ありえない。

悲しいよ。

私は泣きそうになりながら、歯を食いしばった。

「もう。逸美には、友達なんていらないね。」

私は気づいたら泣いていたのがこのはっした言葉でわかった。

声は震え、声は小さくて。

頬を伝った冷たい悲しみ。

『……。』

みんなは驚きながら私の言葉をきいて、黙っていた。

「逸美。バカなんじゃないの？いつか友達いなくなるよ？」

私は一生懸命つぶやいた。

逸美の心に届くように。

「それが何？」

逸美はちょっと怒りながら言い放った。

ちょっと声が震えていた。

「恋愛って無理矢理手に入れたって、面白くないじゃん。楽しくないじゃん。…苦しいじゃん。…悲しいじゃん。好きって気持ちってそういうことなの？」

私は途切れ途切れになりながら尋ねた。

だって、あまりにも苦しいから。

逸美が最後は悲しむだけじゃない。

「余計なお世話よ！！！！」

逸美は怒鳴ってきた。

悲しそうな目をして。

「辛かったんだよね？」

私は逸美に泣きながら近づいた。

歩きながら思った。

頑張ってたんだよね？

自分の気持ち、ずっと我慢してたんだよね？

「何でよ。怒ればいいじゃない。何で…何で？」

逸美は目から出てくる雫を必死に拭いながら言い放った。

その泣き顔は見たことが無くて最初は戸惑った。

でも、その涙でどんぐらい苦しかったのかわかった。

「怒るわけじゃない。あんなに仲良くしてくれたんだから。逸美は逸美だよ？」

私は逸美を抱きしめた。

力をこめて。

ねぇ、逸美。

私の気持ち届いたよね？

「ごめんね。」

逸美は小さな小声でつぶやいた。

消えそうなぐらい小さな声だけど。

私にはしっかり聞こえたよ。

「大丈夫。」

こうして、私と逸美は仲直りできた。

誤解もはれてとても爽快感でいっぱいになった。

ちょっと大人になれたかな？

・・・

でもその迫力に負けないぐらいに。

『ええーーーーーー！！！！』

生徒のほとんどが大声を上げてブーイングをした。

「はやくしろ！！！！」

先生はその声にお構いなしに怒鳴った。

『はい。』

みんなシュンッとしながら返事をして組を作ることにした。

もちろんカップルは二人が一致する。

でも、他はみんなくじ引きになる。

その時だった。

私がくじを引こうとした瞬間…

「お前は俺と。」

いきなり剣が私の手を握ってきてその手を引っ張った。

「…剣！！！！」

私は驚きながら思わず大声を上げてしまった。

だって、小学校から繋いだことが無い手だったから。
大きくて私の手をすっぽりと埋めてしまう。
「そんなに驚かなくても…。」
剣は焦りながらつぶやいた。
ちょっと頬を赤く染めながら。
「ご、ごめん。だって…。」
私は黙ってしまった。
だって、言えるわけないじゃん。
「カップルじゃないのに」なんて恥ずかしくって。
「何だよ。俺じゃ不安か？」
剣は心配そうに私の顔を覗き込んできた。
顔が近い！！！！
「いや。不安ではないよ。」
私は声を裏返しながら首を横にふった。
「？」

剣は顔を傾げ私のことを見つめた。

どうしよう。

私、変なふうに意識しちゃうよ。

私は、赤くなっているであろう頬をおさえながら困っていた。

スキー合宿って…

大変…

・・・

大好き5

スキー合宿一日目

＊二泊三日です。

「準備ができた奴からバスに乗れー！！！」

先生から合図がかかりみんなそれに従った。

そして、私は準備ができていたので、バスに乗った。

バスの中では、ほとんどの人が席に腰をかけていた。

みんな早いなー。

そして、私の隣の人は寝ていた。

横の髪が顔に少しかかっていてちょっと可愛い。

「剣…寝てるし。」

私は独り言をポロリとこぼした。

残念なようなホッとするような。

複雑な気持ちを胸に秘めた。

「誰のこと言ってんの？」

いきなり剣が尋ねてきた。

私はビクッと体がはねた。

そして、剣のほうに体を震わせながら向いた。

「起きてたの？」

私は目を細めながら尋ねた。

私はちょっとだけムスッとした顔をした。

「百面相？」

剣は首を傾げながら言い放った。

笑った顔が妙にかっこよくてちょっと嫌になった。

「あっそ。」

私はそっけなく言い放った。

いつまでもそっちのほうを向いてると意識しちゃうもん。

「ひどっ。」

剣は口をとがらせながらぼやいた。

こうして、バスが出発した。

・・・

最初はとても好調に滑れた。

「こんな簡単なんだ。」

私はスキーをあまく見ていた。

後々になってそのことを気が付いた。

「え？」

バサッ・ドッドッドッ・バタッ。

私はその瞬間スキー場の網を越え、森のほうに落ちてしまった。

「そんなー。」

私はそう残念そうぼやいて、登ろうとしたが…

「痛ッ。」

足に激痛を感じた。

ひねっちゃったんだ。

私は足をさすりながら困った。

私は助けを求め叫んだが…

誰も聞こえてないのか誰一人顔を出さない。

「はあ、待つしかないな。」

私はじっと待った。

誰か来ないかなーとスキー場のほうを眺めながら。

寒い。

誰か…

助けて…

・・・

「…んーー……こだーーー。」

聞き覚えのある声だった。

つばを飲み込みもう一回耳を澄ませた。

「あーーーーーーん……。」

私の一番今逢いたい人だ。

来てくれたんだ。

「あーーーーん!!!!」

剣だ。

剣助けて!!!!

叫びたいのに、寒すぎて声が出ない。

剣。

お願い。

気づいて!!!

「杏!!!!」

ギュッ

いきなり後ろから抱きしめられた。

「やっと…見つけた。」

剣は息を切らしながらつぶやいた。

あったかいや。

「冷え切ってんじゃねぇかよ。このバカ！！！滑れない癖にこっちにくんじゃねぇよ！！！」

剣はものすごい大迫力で怒鳴ってきた。

私は涙目になりながら…

「ご…めん…な…さい。」

自分にも聞こえずらい小声で謝った。

心を込めて…

「本当に心配したんだからな。」

私のことをもう一回強く抱きしめてくれた。

強く。

大事に。

私…

・・・

涙目になった。

「まあ、言ってもこんなことになるのはわかっていたからな。いいんだが。」

先生は笑いながら言い放った。

先生は誰よりも優しいと今思った。

「でも、心配させたんだからちゃんと謝れよ。」

先生は私の頭をポンポンッと軽く叩いて自分の部屋に入っていってしまった。

「はい。本当にすみませんでした。」

私は深く頭をさげみんなに謝った。

ごめんね。

みんな。

「無事でよかったわ。」

逸美は笑顔で許してくれた。

優しい目をして微笑んでくれた。

「昔と変わらねぇな。」

剣が呆れながら言い放った。

ちょっと怒りながら。

「何が？」

私はちょっとムッとしながら尋ねた。

「いつも俺のまねをしようとするところ。」

剣は笑いながら言い放った。

意地悪な顔をしている。

「まねしようとしてない。」

私は怒りながら言い放った。

眉間にしわを寄せた。

「そうかな？」

剣は意地悪な顔をして首を傾げた。

ちょっとニヤつきながら。

こうして、事件はおさまった。

・・・

みんなはきっと寝たと思う…

何故かって？

今が深夜の二時だから。

私は家以外で寝るのは苦手で今はなかなか寝れない。

私はちょっと外の空気を吸いに外に出ようと思って、部屋の扉をあけた。

『あっ。』

私は向かい側から出てくる人と目が合った。

「何で？」

私と同じような驚き顔の剣に尋ねた。

口が半開きで目を瞬きさせながら。

「そっちこそ。」

剣はおどおどしながら私に返してきた。

はじめてみたような気がするここまで驚いてる顔。

「私は寝れないから。」

私は苦笑いしながらつぶやいた。

うつむきながら。

「俺も。本当に俺ら似てるよな。」

剣はどこかに向かって歩きながら呆れていた。

ちょっと寝癖がついてる髪の毛が可愛く思えた。

「どこ行くの？」

ちょっと気になったので、私は剣に小声で尋ねた。

「外。」

剣は私のほうに振り返りながら言い放った。

微笑んでる剣。

何か久しぶりかも。

「私も行く。」

私は少し先に歩いている剣の隣に走った。

・・・

「寒いね。」

私は手の指先に白い息をあてた。

少しでもあたたかくなるように。

「何でそんな格好できてんだよ。ほらよ。これで寒くないだろう？」

剣は着ていた黒いジャンバーを私にかけてくれた。

昔から着ていたこのジャンバーからは剣の匂いがした。

なんだかこの匂い懐かしい。

「いいよ。そんなことしたら剣が寒いじゃん。」

私は心配顔で剣に言い放った。

剣が私のせいで熱出したりすんのは嫌だよ。

「じゃあ、手。」

剣は手を差し出しながら命令をしたかのような口調だった。

その顔は少し暗くてよく見えなかったけど。

多分頬が赤かったと思う。

「え？」

私は何のことかよくわからなくて一回聞きなおした。

「手、かして。寒い。」

剣はちょっと照れながら言い放った。

まるで犬みたいで愛らしく思えた。

「ぷ、照れてるね。」

私はそう意地悪につぶやきながら剣の手に手を重ねた。

その手があまりにも暖かいから、胸が大きく脈を打った。

この時間がいつまでも続くといいのにな。

・・・

次に続く…

大好き6

スキー合宿二日目

スケート場。

私は朝からニコニコしていた。

「何でそんなにニヤついてんの？」

剣が白い目で見つめながら言い放った。

何気に怪しそうな目をしている。

「私スケートすっごく得意なの！！！」

私はすっごく嬉しくて大声で言ってしまった。

張り切ってしまい胸を張った。

「えー。俺の立場ねぇじゃん。」

剣はすっごく嫌そうな顔をして言い放った。

反対方向に顔を向けて困っていた。

「何で？」

私は首を傾げながら尋ねた。

ちょっとからかいたかった。

「俺、スケート苦手なの。」

剣は落ち込みながらつぶやいた。

ため息をついた。

「そうなんだ。ダサッ。」

私は意地悪な顔をして言い放った。

いつのまにか笑っていた。

「うるせー。」

剣は落ち込みながらつぶやいた。

うつむいていた剣は可愛かった。

・・・

きた。

確か、小さいときにも、スケートを滑った。

あのときも剣が隣にいた。

私は思い出しながらゆっくりと滑った。

「イデッ！！！！」

いきなり声が聞こえて体がビクッと跳ねた。

やっぱり。

そう感じて向いた先には…

「もう。剣ったら、うるさいわよ。」

私は剣に注意した。

剣が転びながらため息をついていた。

「しょうがねぇだろ！！俺だって好きでこけねぇよ。」

剣は逆ギレし出した。

私は意地悪な顔をして。

「はいはい。じゃあ、教えようか？」

私は剣に呆れながら尋ねた。

手を差し伸べて。

「いいのか？」

剣は目をウルウルさせながら尋ねてきた。

わざとしている為か、私には可愛いとは思えなかった。

「いいよ。教えてあげる。」

私は白い目でそう答えた。

剣と重なった手のひらは少しだけあたたかかった。

そして、私と剣の特訓をして。

「こうして、こう。はい、それで進む。」

面白い。

楽しい。

そう思えるのは、きっと君だから。

「こうか？」

剣は息を切らせながら尋ねてきた。

「そう、いいよ。これで滑れるでしょ？」

私は笑って剣の手を離した。

ちょっと残念で風が通るのを感じる。

「サンキュウ！！」

剣は笑顔でお礼を言って、滑って行ってしまった。

剣、楽しそう。

私は剣のことを見てそう思った。

まるで雪を始めて見る子犬みたい。

そういえば、小さい頃は手を繋いで、一緒に滑ったっけ。

懐かしい。

私は、何故だか胸が締め付けられた。

私…

・・・

いきなり肩を軽く叩かれ、体がビクッと反応した。

ちょっとムカッときた。

「何？」

私が眉間にしわを寄せながらそのほうに振り返ったら、剣が何か言いたそうに立っていた。

頬が微かに赤い。

「手。」

いきなり剣が言い放って。

手を差し伸べてきた。

「は？？？！！！！」

私は驚きを隠せずに大声を出してしまった。

驚きの顔がもっと険しくなったような気がした。

「そんなに驚かなくても…」

剣は耳をおさえながらつぶやいた。

目を細めた。

「だって…。」

私は目をそらしながらつぶやいた。

きっと今顔が赤い。

すごく熱く感じる。

「なんか昔を思い出しちゃってさ。小さい頃俺の家族と杏の家族とさ、スケート行ったときにさ、俺が全然滑れなくて、杏が手を繋いで一緒に滑ってたなーって。」

剣は懐かしそうにぼやいていた。

何かを思い出すように。

「私もそれ思い出してた。懐かしいね。」

私は切なくなりながらつぶやいた。

胸が締め付けられる感触を覚えた。

「できるだろ。お前が俺と付き合えば。」

剣は真剣に私のことを見つめてきた。

剣の姿が強くなったように感じる。

「え。」

私は戸惑った。

言えない。

だって、この関係が崩れるような気がして。

怖い。

その時だった。

ドンッッ！！！

後ろを滑ってきた人が剣にあたり…

「うわっ！！」

剣がそう叫んだ瞬間に…

「キャッ！！！」

私の剣の顔が目の前に近づいた。

ドン

チュッ

私と剣は倒れた。

その瞬間、何か唇にあたった。

私はゆっくり目を開けた。

「いてて。」

剣が私の上にまたがっている状態だったので。

私は顔が真っ赤になってしまった。

何か期待をしているみたいで。

「ん？杏？どうした？顔すごく赤いぞ？どっか打ったか？」

剣は心配しながら尋ねてきた。

その前にこの状況見なさいよ！！！

パニック状態に陥っている私は心の中でそう叫んでいた。

「はやく…どいて。」

私は小声で言い放った。

私は顔を真っ赤に染めた。

剣はこの状態を眺めて、顔を真っ赤にし…

「ごめん！！！！！！」

剣はすごく焦りながらそう言って私から離れた。

私と剣は目を合わせられずに立った。

「大丈夫。」

私は顔を真っ赤に染めながら応えた。

目が泳いでしまう。

「俺、頭冷やしてくる！！！」

剣はそう言って焦って、滑っていってしまった。

ああー、びっくりした。

私は胸を撫でおろしながら心の中でホッとした。

でも、何か唇にあたったような気がするんだけど。

何があたったんだろう。

・・・

だから杏が真っ赤だったんだ。

うわー恥ずかしいー！！！！

どんな顔してあいつに逢えばいいんだよ。

それに。

杏にキスしちまった。

ああーどうしよう。

・・・

きっと顔が赤いんだろうな。
私は一人で舞い上がっていた。
剣もそれを見てなのか頬が少し赤い。
ちょっと緊張してきたかも。
私は胸をドキドキさせながら席についた。
胸が大きく脈を打っている。
剣にまで伝わりそう。
『……。』
私と剣はバスが発車しても、何もしゃべれなかった。
気まずいかも。
私は一人でそんなことを考えていた。
「昨日は、いきなりごめん。」
やっと、口を開いたと思ったら、いきなり謝ってきた。
私は一瞬びっくりしたものの…
「ううん。大丈夫。」

私は目をそらしながら応えられたのでちょっとホッとした。

会話終了…

何かしゃべってよ。

何でもいいから。

気まずいこの空気を誰か変えて！！！！！

私はそう一人で泣きそうになりながら心の中で叫んでいたら…

思っても見ないことになってしまった。

「昨日はラブかったねー。」

いきなり後ろから逸美が禁句を言い放った。

私は目が大きく開き冷や汗がでてきた。

「いいムガッ！！」

私は逸美が言おうとした言葉を口をおさえてさえぎった。

「その話出さないで！！！」

私は逸美の耳元で小声で言い放った。

お願いだからその話やめて。

私はそう願っていた。

「何で？？！！まさか、もっと進んじゃったの？？？！！！」

逸美は大声で驚いた。

私は焦りながら逸美に怒鳴って落ち着かせることにした。

「うるさい！！！！！そんなこと無いから！！！！！」

私はこの世に生まれて初めてこんなに大きい声を出したような気がする。

こんなふうに、色々あったけど、スキー合宿は無事に終わった。

・・・

私はサッカー部を見ていた。

でも何故か、剣の姿しか見ていなかった。

剣は一生懸命で、ボールしか見ていないのに。

剣、かっこよくなったな。

小さい頃はただのバカだったのに。

私はそう思いながら、サッカー部を見ていた。

すると…

「あれ？杏ちゃん？」

いきなり、聞いたことのない声が私を呼んだ。

私は驚きながらそのほうに向いた。

「え？」

私は驚き顔でつぶやいた。

だって…

全然知らない人なんだもん。

「やっぱりー、杏ちゃんだ！！」

その男の人は笑顔で私に近寄ってきて私の名前を言い放った。

全然知らない。

「え？」

私は戸惑いながら首を傾げた。

知らない人と話すのはちょっと勇気がいることだと思う。

「あれ？覚えてない？」

その男の人はちょっと苦笑いしながら尋ねてきた。

その男の人は黒髪でちょっと長くて前髪が目にかかりそうなくらい長くて。少し癖があった。

色が白くてスラッとした体型、まさに大人な感じがした。

「すみません。」

私は目をうつむきながら謝った。

だって全然知らないんだもん！

私は心の中で泣いていた。

「そっかー。まあ、全然会ってないからね。俺は浅岡（あさおか）　太一（たいち）だよ。君の従兄の。」

その男の人は自己紹介をした。

ん？

何か聞いたことあるぞ？

何か懐かしい。

「えーーー太兄（たいにい）？？？！！！」

やっと思い出せた。

私の従兄で遊んでいてくれていたお兄さん。

私は驚きを隠せなかった。

「懐かしいなーその呼び方。」

太兄は嬉しそうに笑った。

あの懐かしい笑顔で。

・・・

・
・
・
・
・

次に続く…

大好き7

「まさか、こんなとこで会うなんてな。」

太兄は私を見下ろしながら言い放った。

笑っている顔が妙に優しくて、やっぱり昔のままだなーと思えた。

「まさか、太兄だとは思わなかったよ。」

私は苦笑いしながら言い放った。

びっくりした。

太兄がここにいるなんて思いもしなかった。

「この高校だったんだな。驚いたよ。こんなに成長したんだな。」

太兄は私の頭を撫でながら言い放った。

あ、昔の撫で方だ。

太兄は昔からこの撫で方をしていた。

泣いてるときも嬉しいときも、いつも、この撫で方だった。

懐かしい。

何も変わらないね。

「で、何で、太兄がここにいるの？」

私は太兄を見上げながら尋ねた。

思い出したついで。

「あ、忘れてた。明日から俺ここで働くの。教師の見習いって感じ？」

太兄は苦笑いしながら言い放った。

雰囲気が前のままだ。

大人な香り。

「へー。まあ、昔から教師になりたいって言ってたもんね。」

私は笑顔で言い放った。

夢叶うといいね。

「ああ。がんばって、教師になるよ。」

太兄はガッツポーズをしながら瞳の奥で炎を燃やしていた。

ちょっと熱くなったな…。

私は顔を引きつりながら思っていた。

・・・

本当にあのときのままなような気がする。

「うん。バイバイ。」

私は手をふりながら笑った。

トクンッ

胸が軽く鳴った。

私が帰ろうと、足右足の一歩を踏み出したとき…

「おい。無用心女。」

いきなりムカッとするような言葉を言われ、歩こうとしていた足を止めた。

私は眉間にしわを寄せながら…

「何よ。その無用心女って。」

私はその声のほうに振り向いて言い返した。

口角を無理矢理あげて顔を引きつった。

「別に。それよりサッカー終わるまで待ってろ。」

剣はムスッとしながら命令してきた。

何か言いたそうな顔をしている。

顔が無表情でちょっと怖かったけど。

「何で、命令なのよ??」

私はムカついたから尋ね返した。

声のボリュームを少し上げながら。

「知るか。」

剣は本気で怒ってるみたいでちょっと迫力がにじみ出ていた。

う、こ、怖い。

「は??!!!」

私はちょっとおされ気味になりながらも言い返した。

だって、あまりにもムカつくから。

あんたなんかに指図されたくないわよ!!

「待ってろよ。」

剣は静かに迫力を出しながらそう言い残して走っていってしまった。

何あれ?いきなり。

しかも命令？剣の癖に。

私は心の中で頬をふくらませながらすねていた。

のに、何故か…

白いペンキで塗られているベンチに腰をかけていた。

一瞬は帰ってやろうと思ったのだが。

やはり剣には勝てなかった。

・・・

私はくすっと小さく笑った後…

「はいはい。」

私はため息をつきながら剣のほうに走って、隣を歩いた。

少し剣の気持ちが見えて嬉しくなった。

「さっきの男誰だよ。」

いきなり口を開いたと思ったらそれ？

私はムスッとしながら…

「見てたの？」

私はちょっとムカつき、頬をふくらませながらつぶやいた。

嬉しいような、苦しいような。

よくわかんない気持ち。

いつもそう。

剣に気持ちを揺れ動かされる。

「誰だよ。」

剣は怒りながら言い放った。

私はため息をつきながら…

「従兄だよ。」

私はうつむきながらつぶやいた。

素直じゃないな。

普通に言えばいいじゃない。

私ってしゃいなのかな？

「従兄だからって撫でられて嬉しいのか？」

剣は私に怒鳴った。

いきなりで私は驚いた。

何が何？？！！

何で怒られなきゃいけないの？？！！

「剣？」

私は混乱してきた。

あまりにも難しすぎるこの問題に。

「従兄だからって触っていいのか？」

剣は私を睨みながら尋ねてきた。

こっちも素直じゃないな。

そう落ち込みながら何かが…

プチッ

切れた音がした途端に…

「さっきから意味わかんないから！！いきなり怒って。何？従兄とかに撫でられただけなのに何であんたに怒られないといけない訳？？？！！！！」

私は剣に怒鳴った。

力を全部振り絞った。

剣にわかってほしくて。

なのに…

「ああ、そうかよ。じゃあ、勝手に触られてろよ！！！！！」

剣は私にそう怒鳴って歩いていってしまった。

展開は違う方向にいつも向かってしまう。

「意味わかんない。」

私は気が付いたら泣いていた。

頬を伝う冷たい雫。

ああ、なんて悲しいんだろう。

何であんな奴のために泣かなきゃなんないのよ。

私は涙を制服の袖で拭いながらゆっくりと歩いた。

・・・

あいつが俺のものでいてほしい。

誰も、触れさせたくない。

杏。

頼むから。

誰にも、触れさせないでくれ。

・・・

私はうつむきながらつぶやいた。
本当は誰かに聞いてほしかった。
「何があったの？私でよければ聞くよ？」
逸美は心配しながら言い放った。
逸美。
ありがとうね。
「ありがとう。実はね…」
数十分後…
これまでの一部始終を話した。
また泣きそうになる。
いつも剣に勝てない私が悔しい。
「どうしたら…。」
私は落ち込みながら逸美に尋ねた。
きっと逸美ならわかってくれる。
「そういうことだったのね。それは単なる嫉妬ね。」

逸美はあっさり答えを出した。

私は目が点になり。

瞬きをした。

「誰が？」

私は首を傾げながら逸美に尋ねた。

え？

それだけ？

私は心の中で焦った。

「千里が嫉妬してんの。杏に触った、そのー…浅岡っていう人に。」

逸美は平然とした顔で言い放った。

まるで当たり前じゃないっと言っているように。

「何で？」

私は顔が？マークになりそうなぐらい混乱していた。

え？

どういうこと？？

「本当に鈍いのね。杏のことが好きだからに決まってんじゃん。」

逸美はため息をつきながらさらり言い放った。

私は逸美が言ったことが一分たってやっとわかった。

「あ、忘れてた。」

私は何かがわかったように手の平に拳を打ちつけながら言い放った。

私は目を開いた。

「天然っていうか、ただのバカっていうか。呆れるわ。」

逸美は頭をおさえながらつぶやいた。

気がぬけるのも無理は無いと思う。

私ってつくづくバカだわ。

私も頭を抑えてため息をついた。

「ごめんなさい。」

私はちょっと小さくなった。

そんなことを色々話していたら。

ガラッ

教室の古い引き戸がいきなり開いて誰かが入ってきた。

「あ、千里おはよ。」

逸美が挨拶した先には剣が無表情で立っていた。

何か妙に迫力がある。

私はちょっと引き気味になった。

「おはよ。」

剣はそのまま挨拶をして、スポーツバックを自分の席に置いて。

何か用事があるのか、すぐに教室から出て行ってしまった。

「はあ。」

私は深くため息をついた。

こんなのじゃやってられない。

「こりゃまた、気まずい空気をつくってくれるわね。」

逸美は剣が出てっていったほうを見つめながらつぶやいた。

逸美はため息をついた。

どう対処したらいいかわからないよ。

「どうしよう。」

私は誰にも聞こえないように小さい声でつぶやいた。

なのに…

「気にすんな。」

逸美はそれが聞こえたのか、優しく声をかけてくれた。

やっぱり逸美ってすごい。

私は関心した。

「ありがとう。」

私は心の底から逸美に感謝した。

私のことをこれまでに考えていてくれたから。

・・・

悲劇はここから始まっていたことは、誰も気が付かなかった。

「今日からここに勤める、新しい先生を紹介します。先生、どうぞ。」

数学の白いひげをはやしているおじいさん先生がちょっとフワフワしてる声で叫んだ。

「今日から、お世話になる浅岡　太一です。よろしくお願いします。」

太兄は笑顔で自己紹介した。

やっぱり太兄なんだ。

『きゃーカッコイイ！！』

女子の声がそろって聞こえた。

まあ、言われるのも無理はない。

こんなに若い先生は学校では数人しかいないから。

「先生！！バスケかサッカーってできる？」

男子からも声が聞こえた。

太兄人気だなー。

私は苦笑いしてる太兄を見つめながらボーっとしていた。

困っちゃってるよー。

私は遠い目をしながら思っていた。

・・・

大好き8

8、太兄の思い人

私は後期の学級委員になってしまっていたので今、私はというと…

「数学の荷物運びを手伝っています。」

私は一人つぶやいた。

＊ちゃっかりカメラ目線バッチリです。

つまんない。

私はムスッとしながら歩いていた。

どうせあまり大切なのじゃないじゃない。

頬をふくらませた。

目つきが明らかに悪くなった。

荷物は重いし、数学室は遠いいし。

→この学校には数学室という教室があります。

めんどくさい。

「大丈夫？ごめんね？重いよね。」

太兄が私の隣にきて心配してくれた。

優しいなー。

私は関心しながらそう思っていた。

「大丈夫だよ。」

私は太兄に笑顔で答えた。

本当はあまり大丈夫じゃないんだが…

「それにしても、本当に成長したんだな。」

太兄は何かを思い出すように言い放った。

太兄、本当に大人だ。

私は整った横顔を見つめながら思った。

「そりゃそうでしょ。」

私は太兄のほうをから目を逸らしながらつぶやいた。

私はちょっと残念に思いながらそう応えた。

「あんなに小さかったのにな。」

太兄はちょっと寂しそうにつぶやいた。

あの頃のことを思い出しているから？

それとももっと違うこと？

「太兄？」

私は太兄のほうを見つめた。

何か寂しそうだったから。

苦しそうだったから。

「あ、ついた。」

太兄は数学室の前で止まりそうつぶやいた。

さっきの顔は何処へ言ったの？

私は尋ねたかった。

「あ、本当だ。じゃあ、荷物置こうよ。」

私と太兄は数学室に入った。

ちょっと残念。

ガコッ

私はいろんなものが入っているダンボール箱を机の上に置いた。

黒板用の三角定規やら分度器やらが入っていてすごく重いこのダンボール箱を。

「あ、そうだ。色々手伝ってほしいときがあるかもしれないから、番号とアドレス教えてくれる？」

太兄は携帯をズボンのポケットから取り出した。

教師がそんなものここに持っていていいのか？

私は疑問に思いながらも…

「あ、うん。いいよ。」

私もスカートのポケットから携帯を取り出してしまった。

ちょっと太兄をカッコイイと思ってる女子のみんなには悪いけど。

「ありがとう。助かるよ。」

太兄は笑顔でそう言ってくれた。

心にしみるような気がする。

「いえいえ。」

私も笑顔でそう言った。

太兄の心にしみてくれるかな？

交換も終わったので…

「じゃあ、またね。」

私は数学室から出て行った。

このときにもう仕掛けが入ってたんだね。

・・・

ちょっと意識してしまうこの名前。

ーーー太兄ーーー

ーーー今から学校これる？手伝って欲しいことがあるんだけど…

ーーー

私はすぐに返信してしまった。

ちょっと嬉しくなった。

ーーー杏ーーー

ーーー行けるよ。今から、行くね。ーーー

私はもう一回制服に着替え直して、学校に歩いて向かった。

・・・

みんながあわてて部室に入った。

いきなり雨が降ってきた。

「あ、ロッカーに折りたたみの傘があるんだ。取りに行こう。」

俺は思い出したので教室に向かった。

その時だった。

あれ？杏？

こんな時間に何で杏がいるんだ？

とっくに帰ったはずじゃ。

何か、胸騒ぎがしてきた。

着いていこう。

そうすればきっとわかるはずだ。

スタ・スタ・スタ…

ん？

杏が立ち止まったところは、数学室だった。

胸騒ぎが倍にしてきた。

数学室って、まさか！！！！

・・・

「キャッ！！！」

ドン

いきなり太兄は私の腕をひっぱり机の上におさえつけた。

太兄の目は鋭く光り。

獣のような目だった。

「た、太兄？？？！！！」

私は泣きそうになりながら叫んだ。

目は大きく開き、腕は締め付けられ痛くなった。

「俺はずっと思ってた。杏ちゃん、君のことを。」

太兄は悲しそうな顔をしながら言い放った。

でも、目の奥が怖くなっていた。

「え？」

私は驚いた顔をしながらつぶやいた。

だって、太兄が私のことを思ってたなんて。

「杏ちゃんに会うためにどんなに苦労したか。俺のものになってくれ。」

太兄はそうつぶやいた後、私に顔を近づけてきた。

私は必死に腕を振りほどこうとしたのだが、太兄はびくともしなかった。

「ちょっ…んん！！！」

太兄は強く私に唇を重ねてきた。

いや！！！！！！！

バンッ

開くはずのない引き戸がいきなり開いた。

「ふざけんなー！！杏に触るんじゃねぇーー！！！！！」

ガンッ

いきなり剣が太兄に殴りかかった。

いるはずのない剣が何で？

私は口を拭きながら驚いていた。

「やめて！！！剣！！！！！」

私は学校中に響きそうなくらいな大声で怒鳴った。

自体は深刻なはず。

ピタッ

剣の今にも殴りかけそうな右手は微かに震えていた。

剣は口をかみ締めてすごく悔しそうに太兄のほうから少しさがった。

「どうして、どうして、君は遠くに行ってしまう？俺が君の恋人にはなれないのか？ずっと、思っていた。君の事を忘れるときなんて一度も無かった。」

太兄は顔を腕で隠しながらつぶやいた。

きっと泣いてる顔が見てほしくないのだろう。

私はその震えている太兄の手を握りながら。

「私にとって、太兄は優しいお兄さんだよ。それは変わらないよ？私には太兄はお兄さんとしか、見れない。だから、恋人としては見れない。ごめんね。太兄。でも、これからも私が困ってたら、助けてね。支えてね？」

私は泣きながら微笑み、太兄にささやいた。

太兄の心に響いてほしくて。

「ありがとう。杏ちゃん。」

太兄はうつむき泣きながら応えてくれた。

私にはあなたは何もならないのがわかった。

・・・

笑いをこらえるのにちょっと大変になった。

「どうした？」

剣が私の顔を覗き込んできた。

その仕草がすごくかっこよくて。

「剣はズルイよ。」

私は気がついたら泣いていた。

何でだろう？

私は自分で困っていたとき…

ギュッ

いきなり剣は抱きしめてきた。

ガシャンッ！

……ッカサ

剣の持っていた自転車が倒れた音が辺りに響いた。

私は驚いて、力が抜けてしまい剣の黒い折りたたみ傘を落としてしまった。

「…剣？」

私は泣きながら剣を呼んだ。

剣に聞こえるように。

「黙れ。ずるいのはお前のほうだろ？」

剣は私のことを抱きしめている力を込めた。

強く力が入っているのであたたかかった。

「え？」

私は混乱しながら尋ねた。

大きくてあたたかいこの腕の中で迷い道に遭遇してしまった。

「黙って顔上げろ。」

剣は優しくささやいた。

その声は低くいのに、あたたかくてつい従ってしまった。

その時だった。

初めての感覚。

何か温かくて、ちょっと冷たくて、でも心地よい感覚。

あー…好きってこういうことなんだ。

剣の唇と私の唇が重なったとき。

剣。

私…

・・・

女の子はまるで小鳥のさえずりような可愛い声で尋ねてきた。

手を口にそえながら困っていた。

「あ、はい。知ってますよ。この家です。」

私は私の家の隣の家を指さした。

相変わらず近い家。

「ありがとうございます。」

女の子は可愛い笑顔を見せながらお辞儀をしてくれた。

なんて可愛いんでしょう！！！！

私は一瞬にして心を奪われてしまった。

「いえいえ。」

私が満開の笑顔で言い放ったとき…

剣の家から剣が出てきた。

その時、突然女の子が剣のほうに走っていき…

ムギュッ

女の子は剣にいきなり抱きついた。

ガビーン

私は軽いショックをうけた。

「ウワッ！！！って、お前、いつ日本に！！！って離れろ！！！」

剣はたじたじになりながら怒鳴っていた。

何か、知り合いって感じ。

「？」

私はただ首を傾げただけだった。

よくわからない。

「もう。剣ったら照れちゃってー！！」

女の子は嬉しそうに言い放っていた。

ムカッ

私は心の中でちょっとムカついた。

「あのなー！！いい加減にしろよ。」

剣は怒りながら、冷静に言い放った。

何か兄弟みたい。

「ブー。」

女の子は白い頬をふくらませながらいじけ、剣のことを離した。

「剣。この子って誰？」

私は疑問に思ったので剣に尋ねた。

ちょっと心の中でムカついたから。

「…剣？」

女の子は私のほうに向いたかと思うと、すごく怖い顔をしながら睨んできた。

う、小さいのに迫力がある。

「な、何？」

私は顔を引きつりながら尋ねた。

何か怖いー。

私はちょっとビクッとしながら思っていた。

・・・

このせいで私はむしゃくしゃした。

これってまさか…

・・・

大好き9

「剣？」

女の子はすごい目力で私を睨みつけてきた。

私は一瞬金縛りにあったような気がした。

「何か変なこと言った？」

私は怖い女の子に汗をたらしながら尋ねた。

怖いー。

「剣のことなんで名前で呼んでんの？」

女の子はもっと迫力を出しながら私に尋ねてきた。

何か圧力かかってますけど？？？！！！

「え？それは…」

「幼馴染だから。」

私が言おうとしたときに剣がさえぎって言ってくれた。

でも、ちょっとショック受けたかも。

「え？幼馴染なの？」

女の子は私に尋ねてきて私が言う前に。

「なら、いいや。」

女の子はくるっと違うほうを向きながらつぶやいた。

え？

どういう意味？

「なんで？」

私は疑問に思ったので尋ねた。

女の子をよく見たら茶髪でふんわりカールをしている髪の毛で。

まるで違う国の子みたい。

「彼女じゃないならいいや。剣まだ彼女いないよね？」

女の子は剣の腕にしがみつきながら尋ねた。

女の子は両方の耳にピアスの穴が一つずつあいている。

目の色は黒色なのに…

何でかな？

私は首を傾げながら女の子のことを見つめていた。

「え、い、いないけど…。」

剣はちょっと困りながら私のほうを見てきた。

何で私のほう見んのよ??

私は目を点にさせながら剣を見つめた。

「何?」

私は訳が解らず戸惑いながら尋ねた。

「なら、いいや。いないよ。」

剣はため息をつきながらつぶやいた。

今のため息なんですか??!!

私は一人で突っ込んでいた。

「よかった。じゃあ、今日から私が剣の彼女。」

女の子は剣の頬に軽くキスをして言い放った。

は??!!!

いきなりすぎでしょ?

「え???!!!」

私は思わず怒鳴ってしまった。

あまりにも突然すぎるので。

それに…

「何？あなたはただの幼馴染でしょ？」

女の子は「やったわ」というような顔で私に尋ねてきた。

ニヤつきがすごくムカつき。

私はムスッとした。

下唇を悔しいのでかみ締めた。

私はうつむきながら落ち込んだ。

こんな土壇場で負けるなんて。

「さ、学校へ行こう？剣。私今日から剣と一緒の学校だから。」

女の子は剣にそう言い。

剣の腕を掴みながら歩いていってしまった。

なんだろ？この気持ち。

何か、モヤモヤする。

何か、剣を遠くに行ってしまったように感じる。

私はこの気持ちのまま学校に向かうことになった。

昨日のことは夢だったのかな？

そう信じるしか私にはできなかった。

・・・

ガラッ

古い引き戸を開けてきたのは…

やっぱりあの白い女の子だった。

私はため息をついた。

「今日からお世話になる。秋沢（あきざわ）　明日香（あすか）です。明日香って呼んで下さい。どうぞよろしくお願いします。」

明日香は自分の名前を名乗り、先生に指示された席に着席した。

→もう名前呼びしている。

私は気になったので明日香のほうを見た。

そしたら、明日香も私のほうを見て「勝った」っと言っているかのようにニヤッと笑った。

グッ

私は拳を握った。

何か悔しい。

周りの男子達は鼻の下を伸ばしている。

女子達はちょっと警戒の目で見ている。

私はうつむいて落ち込んでいた。

何しろ朝からいろんなことが重なってしまい。

よくわからない状態になっているため。

・・・

「あ、うん。大丈夫。」

私は苦笑いしながら言い放った。

これ以上心配させたくない。

「本当に？ちょっと顔色が悪いよ？」

逸美は心配そう言い放った。

逸美、ありがとね心配してくれて。

「大丈夫。ちょっとトイレ行ってくるね。」

私はそう言って席から立った瞬間。

グラッ

視界がおかしくなり変な感じがして次の瞬間…

バタッ

私は、倒れた。

「杏？？！！！杏！！！！ちょっと！！！どうしたの…。」

私はそして気を失ってしまった。

・・・

剣

杏が…倒れた??!!

俺はすぐに杏に近寄った。

貧血だな。

「俺が運ぶ。」

俺はそう一言教室に残して歩き始めた。

昔からこうだ。

何か心配ごとがあるとすぐに具合を悪くする。

ストレスからくるもの。

ガラッ

俺は保健室に入って、杏をベットに寝かせた。

「あら、貧血ね。」

保健の先生は慣れているため、すぐにそうつぶやいた。

一年生からよく顔を合わす保健の先生。

「はい。少し休ませてやってください。」

俺はそう言って、保健室を出た。

わかっているからあまり心配はしない。

「剣。」

保健室の白い引き戸の隣のコンクリートの壁に明日香が立っていた。

明日香は悲しそうな顔をしていた。

「明日香？何でここにいるんだよ。」

俺は驚きながら言い放った。

心配にさせるその顔。

やめろよな。

いい加減。

「剣はあの子のこと好きなんでしょ？」

明日香は悲しそうにつぶやいた。

わかってたんだな。

やっぱり。

「え？ま、まあな。」

俺はちょっと目をそらしながらつぶやいた。

ここで言うか？普通。

呆れながらそう応えた。

「私は諦めないから。諦めたら…」

タッタッタッタッタッタ…

明日香は苦しそうな顔をしながら何かを言いかけ、走っていってしまった。

意味がわからない。

俺はちょっと焦った。

「明日香？」

俺は首を傾げながらつぶやいた。

何しろあの明日香だからな。

本当に意味がわからん。

・・・

私は夢を見た。

どんな夢かって？

じゃあ、特別に教えるよ。

幼い頃の思い出。

私がまだ、十歳くらいの時。

私の家の近くに公園があるの。

私と剣はよくそこで遊んでいた。

その日は秋だというのに真夏ぐらい暑かった。

私と剣の二人で遊んでいるときに、いきなり剣が木登りをし始め。

それに連れられて私も木登りをし始めた。

そして、大きな木の天辺につきそこから顔を出して、風景を眺めた。

その風景がどんなに綺麗な宝石よりも綺麗だと思った。

キラキラしていた。

見るものすべてが小さくて、まるで空を飛んでいるように見えた。

その時だった。

「エッ！！！！！」

私はその言葉と共に、その木から落ちた。

そして、目を開けたときにはみんなが泣いていた。

起き上がったら、みんながまた泣きながら喜んだ。

右足と左腕を骨折。

私は二ヶ月入院した。

その時に剣が私の父母を驚かすようなことを言ったらしい。

それは…どんな言葉よりも嬉しく感じた。

でも、まだ内緒ね。

・・・

ちょっと茶色と黒色の中間ぐらいの綺麗な髪の毛。

まつげは長くて、鼻がちょっと高くて、唇は薄っすら桃色で。

一見普通の男子なのに、何故かじっくり見ると美形なんだよね。

こんなにかっこよくなったの？剣。

私は剣の髪の毛に軽くキスをした。

内緒だよ。

「？あ、杏。起きたのか？」

剣が寝ぼけながら私に尋ねてきた。

気づいてないよね？

「うん。」

私は微笑みながらうなずいた。

心が弾んだ。

そのときだった。

ギュッ

剣が私のことをいきなり抱きしめてきた。

私はたじたじになりながら。
「ちょっ…剣？」
私はちょっともがきながらつぶやいた。
大きく脈が打っている。
剣に気づかれちゃう。
「あ、ご、ごめん。」
剣は謝りながら私を離した。
ビミョーな雰囲気が私と剣を包み込んでいる。
どうしよう…。
そんなときだった。
ガラッ
いきなり保健室の引き戸が開いた。
そこから入ってきたのは…
「明日香？」
剣がそうつぶやいた。

微かに震えた声が私にしみた。

「何でここに？」

剣は驚きながら尋ねた。

私はそのほうを見つめた。

「杏。」

明日香は私に真剣な目を向けた。

「はい？」

私は声を裏返しながら反応した。

「私と対決よ。」

明日香はまっすぐに私を見た。

え？

今なんと？

「え？」

・・・

でも、私は…

・・・

大好き１０

『対決？』

私と剣が一緒に尋ねた。

私は首をかしげ、剣は眉間にしわを寄せた。

「そうよ。剣をかけた、真剣勝負。負けたら、剣のことを諦めるのよ。」

明日香の目は本気なようで、私はつばを飲み込んだ。

何でこうなるのー。

私は心の中で頭をおさえて絶望していた。

「は？お前…」

「黙って！！！！これは私と杏の問題。」

明日香は剣が何か言おうとした口をおさえた。

剣は何を言おうとしたの？

私はそっちのほうが気になった。

「私は諦めない。私が諦めたら…私は何のために日本に帰ってきたのよ！！！」

明日香は泣きそうになりながら怒鳴った。

何か苦しそう。

明日香は一体どんな思いで…

「明日香？」

私は心配しながら明日香の顔を覗き込んだ。

心配になってきた。

あなたが考えてることは何？

「私は、絶対諦めない！！！」

明日香はそう怒鳴った途端に保健室を出て行った。

悲しそうな顔、苦しそうな声、今にも涙がこぼれそうな瞳。

よっぽど心に気持ちを秘めているのがわかった。

私と剣は明日香が出て行ったほうを見つめていた。

ねぇ、剣。

明日香は何のためにここにきたの？

帰ってきたって何？

私はそう尋ねたかった。

でも、言えるわけが無い。

だって、明日香が飛び出していった引き戸をずっと見つめているんだもの。

苦しそうで切なそうな顔をして。

ねぇ、剣は明日香のことを、どう思ってるの？

複雑すぎて、何かが胸に突き刺さるような痛みを感じた。

森の中に入って、道に迷っているような感覚。

明日香と剣はどんな関係なの？

ねぇ、つらいよ。

もし、もしだよ？剣は私が尋ねたら答えてくれる？

ねぇ、怖いよ。

何かを失ってしまいそうで。

・・・

「対決は明日、種目は弓道よ。」

いきなり教室で言われ、驚きながらうなずいてしまった。

でも、どうして？

弓道？

「じゃ。さようなら。」

明日香はそう言い残して帰ってしまった。

「って、私弓道なんてやったこと無いわよ！！！！」

私は一人で大声を出してしまった。

思いっきり席を立って叫んだ。

「やっぱり、そうくると思ったよ。」

いきなり剣がつぶやいた。

何で？

「…びっくりした。やっぱりって何で？？」

私は首を傾げながら尋ねた。

いつもこの人に驚かされてるような気がする。

「あいつ、弓道で４段だからな。小さい頃からあいつは弓道一本だったよ。」

剣は遠い目をして言い放った。

小さい頃から？

そんな前からのつきあいだったの？

ねぇ、気になるじゃん。

「何でそんなこと知っ…」

「おーい！！！千里ー！！！日直の仕事ちゃんとやれー！！！！」

私が尋ねようと思ったときにいきなり一人の女子が剣を呼んだ。

私は勇気を振り絞ったのに。

「あーわりーわりー。ほんじゃ、またな。」

剣はそう言い残して行ってしまった。

いつもそう。

私が聞こうとしたことは無視するよね。

私は落ち込みながら剣と違う反対の方向に向かって歩いた。

何でこんなこと聞けないんだろう？

何を怖がってるの？

何でこんな胸が苦しいの？

もうやだよ…。

・・・

明日香は私にそう言って、服を渡してきた。

ムスッとした顔をしながら。

私はちょっと落ち込んだ。

私はその服に着替え、弓道場に入った。

すごい空気。

怖いくらい緊張感がある。

こんなの初めて。

私が驚いていたら…

「あなたにはこれから練習をしてもらうわ。コーチはちゃんと呼んどいたから。あなたが五本矢を射てたら、対決を開始するわ。」

明日香は顔が真剣な顔に変わっていた。

弓道場では顔が違うんだな。

私は関心していた。

「うん。わかった。」

こうして、やり始めた。

でも、すぐ上達するわけもなく。

一時間経過…

一本も当たらない。

こんなの無理だよ。

私は諦めながら、血豆をつくりやり続けた。

手がじんじんする。

やり続け、二時間がたった。

カランッ

弓が音をたてながら床に落ちた。

「痛い。」

私は手をおさえながら座り込んでしまった。

痛すぎ。

血豆はわれて血が流れていた。

赤く腫れている。

「おい…」

「あんたの想いってそんなもの？」

コーチが何か言おうとした言葉をさえぎって明日香が私の前に立ち言い放った。

今は力が入らなくて立てない。

「え？」

私は明日香を見上げた。

上から見下ろされる感覚は何か気に触るものがある。

「あんたが剣に対する想いってそんなもの？剣のことを大切に想ってるってことはないの？剣が…」

剣、剣、剣って…

私は何かがプチッ音をたてたと思った瞬間。

「剣って言うな！！！！！」

シーン…

いきなり私が叫んだからか、周りはみんな黙ってしまった。

目は鋭くナイフみたいな瞳になり、顔が引きつった。

「剣のこともよく知らないくせに呼び捨てにしやがって、ふざけんな！！！！剣の何を知ってるって言うの？？？！！！いきなり横か

ら入って来た子に剣のことを呼び捨てになんかされたくない！！！！！」

私は怒鳴りちらした。

私は気づいたら泣いていた。

頬を伝う感触が鼻をツーンと何かをさす。

何でかな？

こんなに言えるなんて。

「は…は？あ、あんたなんかに私のこの気持ちがわかる？私はあったときから大好きなの。あなたの想いと全然違うの。それに、私と剣はいいなずけなんだから！！！！！」

明日香も怒鳴ってきた。

私の頭に残った言葉が…

「いい…なず…け？」

私はこの言葉で頭が真っ白になった。

初めて聞いた。

剣にいいなずけがいたなんて。

ねぇ、何で剣は言ってくれなかったの？

「明日香！！！！お前バカだろ？？？？！！！！！」

いきなり剣が弓道場に入ってきて、明日香の口をふさいだ。

剣があんなに焦ってる。

嘘じゃないんだ。

「剣？」

私は剣のほうを見上げた。

まるで嘘じゃない？と目で尋ねているように。

剣の心に尋ねるように。

「杏。ごめん。隠すつもりじゃなかったんだ。」

剣は苦しそうな顔して言い放った。

ああ、何か胸が痛い。

息苦しい。

「え？な…なんのこと？」

私は泣きながら苦笑いをした。

お願い。

嘘って言って。

聞かなかったことにして。

「バカやろ。お前、言ってることとやってることが違うんだよ。」

剣はそうつぶやきながら私のことを強く、抱きしめてくれた。

あたたかくて大きくて私をすっぽり包むよう。

今は剣の匂いが涙をもっと倍増させる。

「バーカ。俺がお前のためにかってやらー。」

剣はそう力強く言っていきなり走り出した。

そして、一分もたたないうちにもどってきた。

早くすぎない？

「袴？」

私は首を傾げながら尋ねた。

剣が袴姿になっている。

「久しぶりに着たわ。この服。めっちゃ懐かしい。」

剣はジャンプをしながら言い放った。

身軽だな。

「何で？」

明日香は驚いた顔で戸惑っていた。

だって、袴姿って。

「決まってんだろう？俺が杏のかわりに相手してやらー。トータル戦な。俺が勝ったら、俺のいいなずけってことを無しにする。お前が勝ったら、俺があんたのことを好きになる。いいな？」

剣は怖い目で言い放った。

何かを決意している力強い目をしていた。

「いいわよ。対決を開始するわよ。」

そうして、対決は始まった。

どんな展開よこの光景。

・・・

審査員の声が響く。

すごい。

バンッ！！

「トータル１１！！」

明日香も剣もどっちも譲らなかった。

剣って弓道できたんだ。

私は始めて気づいた。

「何であんなに集中力がもつんだよ。」

一人の男子が驚きながらつぶやいた。

確かに。

こんなのきっと弓道部でも中々見ない光景らしい。

バンッ！！

「トータル１２！！」

バンッ！！

「トータル１２！！」

カスッ

明日香の撃った矢は的を射ていなかった。

え？

「勝者千里　剣！！！！！」

いきなりで、時間が止まったように思えた。

私はいつのまにか泣いていた。

開いている口を両手で隠しながら涙が頬を伝う。

嬉しすぎて。

怖いくらい夢みたい。

「言ったろ？俺がお前を守るって。」

剣はそう言って太陽みたいに笑った。

私は走って、剣の胸に飛び込んだ。

「剣。大好き。」

私は抱きしめながら、誰にも聞こえないくらい小声で言った。

ねぇ、剣。

聞こえた？

・・・

大好き１１

１２、前言撤回

「これでいいだろ？俺のことは諦めてくれ。」

剣は真剣な眼差しをしながら明日香に言い放った。

ありがとう。

剣。

「ずっと好きだった。だから、小さい頃から弓道に入ってた。」

明日香は泣きながら話してくれた。

でも、微笑んでいるようにも見えた。

優しい口調。

何かスッキリしたらしく。

「でも、もう諦めるしかないわね。私からもおば様達とお母様達には言っておくわ。いつまでもお幸せに。さよなら。」

明日香はわずかに悲しそうに帰っていった。

明日香がどんな思いをしてきたかがにじみ出ていた。

ごめんね。

明日香。

私は落ち込みながらそう心の中で謝った。

でも、明日香のおかげで、正直になれたよ。

「はあー疲れた。」

剣はそうつぶやきながら座り込んでしまった。

あんなに神経使ったもんね。

そりゃそうだよね。

「大丈夫？ごめん。私のせいで。」

私は豆ができている剣の手を握り締めた。

大きくてあたたかい。

剣の手。

少しゴツゴツしていて男の子の力強い手。

「大丈夫。それより、明日香のことちゃんと話してなかったな。」

剣はちょっと苦しそうに話し始めた。

きっと話したくなかったよね。

「明日香と俺は最初、弓道クラブで出会ったんだ。俺小さい頃弓道クラブ入ってたんだよ。その弓道クラブに明日香は途中で入って来た。なのに、すごく呑み込みが早くてさ。すげなーって思って声をかけたんだ。これが、多分この原因になったんだと思うんだけどさ。声かけたらさ、俺にどんどん近づいてきてさ。毎日毎日、話しかけられるようになってな？終いには、母さんが明日香の母親とお茶したみたいでさ。仲良くなっちゃって。それで、仲がいいなら大人になったら結婚させようってことになっちゃったらしくてさ。それで、話がどんどん進んじゃってさ。でも、明日香の父親の関係でアメリカに転勤することになって。それで、やっと開放されてたんだけど…やっぱり、帰ってきたな。ごめんな。隠すつもりではなかったんだけど。」

剣はちょっと心配そうに言い放った。

その顔でわかった。

長年苦しんでいたんだね。

「大丈夫。」

私はスッキリした顔で言い放った。

やっとわかったよ。

剣と明日香の関係。

よかったよ。

聞けて。

「ありがとうね。剣。」

私はちょっと頬を赤らめながらつぶやいた。

だって、嬉しいんだもん。

これからも剣の隣にいれる。

「お前って、小さいときからのその癖可愛いよな。」

剣は笑いながら言い放った。

え？

今言わなくてもー！！

私はもっと顔が赤くなった。

「バ、バカにしないでよ！！！」

そう言いながら内心すごく嬉しいんだ。

剣の笑っている顔をまた見れるから。

また、こう言ってくれると思うとね。

心が弾むんだ。

こうして、一緒に帰った。

もっと剣のことが知りたいよ。

・・・

やっぱり剣だ。

剣はそう言い残して電話を切った。

いきなり何？

私はムカつきながらも…

あわてながら仕度をした。

いつも、乗せられるんだよな。

私は自分で自分に呆れていた。

そして制服に着替え、カーテンをあけた。

窓の先には剣が手を振っている。

ガラッ

私は窓を開けた。

「いきなりな、キャッ！！」

私はいきなり手を引かれて、剣の部屋に連れ込まれた。

一瞬死という文字が見えた！！！！

怖かった。

私は泣きそうになったが我慢をした。

「な、何？」

私は剣の顔のほうに目を向けた。

剣の表情がよく見える。

何か安心する。

「俺がこれから、母さんに言いに行くから。ドアに隠れて聞いてろよ？じゃ、行くぞ。」

剣はそう言って私の手を握って、階段を下りた。

いきなり何？？！！！

てゆーか手ー！！！

ヤバイってー！！！

私は意識が飛びそうになりながらも付いていった。

私はドアに隠れて、剣はそのままリビングに勢いよく入っていった。

「母さん、前言撤回！！！明日香から聞いたか？」

剣は単刀直入に言い放っていた。

バカ…

私は一瞬ガクッと力が抜けた。

ちゃんと言おうよ。

説明しようよ。

私は剣に呆れていた。

「はいはい。聞いてるから。何でそんなに嬉しそうなの？」

叔母さんが冷たく尋ねてきた。

声で呆れているような声をしていた。

さすが、剣のお母さんだな。

→何が？

「だって、俺明日香のこと好きじゃねぇもん。」

剣はそう叔母さんに言い残して、リビングから出てきた。

私は何故か泣いていた。

何故だか心があたたかくなった。

剣。

私は剣のことを見つめた。

そして、剣は泣いていた私を優しく抱きしめてくれた。

「俺が好きなのはお前だけだから…安心してくれ。」

剣は優しく囁くようにつぶやいた。

声が心に響いて、ゆっくりとしみていく。

この感覚。

すごく嬉しい。

今、言わなくちゃ！！

「ねぇ、前言ったこと聞こえた？」

私は剣を見つめながら尋ねた。

今言わなくちゃいつ言うっていうのよ。

「は？何それ？」

剣は首を傾げながら尋ねてきた。

やっぱり。

剣のことだから聞こえてないだろうと思った。

「好き。」

私は小さい声でつぶやいた。

本当は思いっきり言いたいんだけど。

恥ずかしいから言えないの。

「何？聞こえない。」

剣は意地悪そうな顔をしながら言い放った。

あ、こいつ！！！

私は顔を赤くした。

「もう！！！わかってるのに。言わせたの？！」

私はちょっと怒りながら言い放った。

信じらんない！！！

意地悪すぎでしょ？？！！

「ごめんごめん。でも、ちょっと黙って。」

剣はそう言うと私の顔に顔を近づけてきた。

何か近くない？

私、顔やばくない？

「え？」

「黙れ。」

そう言って、私の唇と剣の唇は重なった。

好きになるってこういう感じなんだ。

あったかくて難しくてすごく心地よくて大切なもの。

君を好きになってよかった。

剣。

ずっと一緒だよ。

・・・

「お前がそうなってるのは俺には関係ないだろ??!!!」

パリーン!!

さっきのに負けないくらいすごい音が聞こえてきた。

今日の喧嘩はやけにすごい。

いろんなものの壊れる音がする。

怖いような慣れているような。

私は何故か、自分を孤独に感じる。

剣、助けて。

私は携帯を握り締めながらそう願った。

すると…

ブー・ブー・ブー…

メールのバイブが鳴った。

剣からだった。

私は急いで携帯を開き、画面を見た。

ーーー剣ーーー

ーーーカーテン開けてーーー

そう打ってあったので。

私は…

シャー…

カーテンをあけ窓を開けた。

「こっちに来い。」

剣は優しい微笑みで私に手を差し伸べてくれた。

ああ、やっぱり。

私、この人のこと好き。

何回も実感する。

この気持ち。

「うん。」

私はそう頷いて剣の手を握りしめた。

この手の感触は小さい頃とは違うけど。

やっと手にいれた幸せだもの。

いつもより力を込めて握りしめた。

「叔父さんと叔母さん今日すごくない？音がすごい聞こえるんだけど。」

剣はちょっと困りながら言い放った。

心配してくれてるんだ。

剣、ありがとう。

「うん。でも、喧嘩は毎日してるのに離婚はしないんだよね。」

私は困りながら疑問に思っていた。

小さい頃から、ずっと聞いてきた喧嘩。

でも、何故か離婚はしなくて。

仲がいいのか悪いのかよくわからない状態なのだ。

「確かに。いつも喧嘩してんのにな。喧嘩するほど仲がいいってやつ？」

剣は首を傾げながら言い放った。

眉間にしわが寄っていた。

あんまりこういう顔みたことが無いから、一回だけドキンッと胸

が鳴った。

「でも、さすがに今日はちょっと怖い。」

私は震える手を隠しながらつぶやいた。

本当は隠していた。

気づいたら、剣が心配しちゃう。

「我慢しなくていいから。怖いときは怖いって言え。俺が飛んでってやるから。」

剣はそう言って私のことを強く抱きしめてくれた。

ばれてたんだね。

やっぱり剣には隠せないか。

剣の腕の中はあったかくてすごく落ち着く。

私は震えがゆっくりとおさまっていった。

「ありがとう……剣?」

私は剣の顔を見つめて剣を呼んだ。

こっちを見てっと言いかけるように。

「ん?」

剣は思ったとおりに私のほうを向いてくれた。
こんな姿が新鮮で初めて味わう感じがする。
「大好きだよ。」
私は剣に照れながらつぶやいた。
だって抑えきれないほど募っていた思いだもの。
ちゃんと言いたいじゃない。
「お前って本当に可愛いな。」
剣は笑ってそう言ってくれた。
剣の顔が優しくて、私はうっとりしてしまった。
この空気が嬉しい。
ピタッ
いきなり音がしなくなった。
「え？音がしなくなった？？！！」
私は驚きながら家のほうを見た。
いきなりなんで？

そんな早くまるく収まらないはず。

「本当だ。でもなんかおかしくないか？」

剣はちょっと怖い顔をしながら言い放った。

私と同じことを考えていた剣。

まるで一心同体だね。

私はちょっと嬉しくなったが、今はおいておくことにした。

「ちょっと様子を見に行こう。」

剣はそう言って私の部屋に飛びこんだ。

私もそれに連れられて家に帰った。

ガチャッ

リビングのドアを開けたら怖くて声が出なかった。

血だらけになりながらお父さんがお母さんの首をしめていた。

「やめろー！！！！！」

剣はそう言いながらお父さんをお母さんから遠ざけた。

私は座り込んでしまった。

何で？

「杏？大丈夫か？」

剣は私を心配してくれた。

でも、私にはそれが聞こえなくて。

目の前の光景に目が取られてしまい。

「いや…いや…いや！！！！」

私は頭を抱えながら叫んだ。

怖い。

悲しい。

苦しい。

いやだよ。

「落ち着け杏！！！！お前がしっかりしなきゃ叔父さんと叔母さんはどうなんだよ！！」

剣がそう言ってくれたおかげで私は意識をもどした。

剣…

ごめん。

そうだよ。

私がしっかりしなきゃ。

「あ、お母さん。」

私はお母さんに近づいた。

擦り傷や切り傷がすごくて血だらけになっていた。

何でこんなになるまで喧嘩なんかすんのよ。

私はあごに力を込めて歯をくいしばった。

「はあ…はあ…」

お母さんは息をしていた。

よかった。

まだ生きてる。

「剣、お母さんはちゃんと息をしてるわ。」

私は剣にそう知らせてハンカチで血を拭いた。

届いたよね。

剣は力強くうなずいた。

「叔父さん。俺が誰だかわかる？」

剣はお父さんに尋ねた。

お父さんは息を切らしながら、目を血走らせていた。

こ、怖い。

私は少し震えながらもお父さんのほうを見た。

「お前が生まれなければ…」

微かな小さい声が発した言葉は…

私の呼吸を止めた。

「叔父さん？？」

剣が驚きながらとめようとしているらしく。

お父さんのことを呼んだ。

「お前が生まれなければこんなことにはならなかったんだ！！！！！」

お父さんは私にそう叫んだ。

心に重く圧し掛かり。

呼吸ができなくなった。

「え？」

私はわけがわからず一言つぶやいた。

何か言わなきゃ。

何か言わないと。

「お前があのときにあいつの腹にできてなければこんなことにはならなかったんだ！！！！」

頬に涙が伝わる。

冷たい雫が床に一粒落ちた。

私がいなければこんなことにならなかったの？

「杏？」

剣がそう囁いてくれたことは私には解らなかった。

私は光りを失った気持ちになった。

前が見えないよ。

誰か、助けて。

「お前さえ…」

剣はお父さん口をふさいだ。

剣は今までにない怖い顔でお父さんのことを睨んだ。

「これ以上。杏を苦しませないでください。」

剣はお父さんにそう言い放って私を抱きしめてくれた。

剣？

剣なの？

ねぇ、つらいよ。

「私がいなければこんなことに…」

私は放心状態になっていた。

何がなんだかわからなくなりもう何も考えられなくなった。

「そんなことない。安心しろ。」

剣は力強く言い放った。

私の心にしみて。

もっと涙があふれた。

「だって、お父さんが……私生まれてこなきゃよかった。」

私は剣の腕に抱きしめられながら、自分の心を見失ってしまった。

・・・

大好き１２

「お前がいなかったら俺はどうなってんだよ??!!!しっかりしろ杏!!!!」

剣が叫んだ。

剣。

助けて。

苦しいよ。

悲しいよ。

私は泣きながら剣の袖を掴んだ。

力いっぱい。

今は息ができないぐらい。

苦しくて言葉がでなかった。

「とりあえず、救急車を呼ぼう。」

そう剣が優しくささやいてくれたので。

私はただうなずくことしかできなかった。

・・・

「ええ。私の大切な子供の杏よ。」

お母さんはそう言って私の頭を撫でてくれた。

私は久しぶりにお母さんのぬくもりを感じて、また涙をこぼしていた。

ねぇ、お母さんはどう思ってるの？

「ねぇ、お母さん。私がいなければこんなことにならなかったの？」

私はお母さんに尋ねた。

胸がすごく痛かった。

胸が締め付けられる思いを感じた。

「誰がそんなこと言ったの？？？！！！！」

お母さんは目を見開き、すごく怖い顔をした。

きっと心の何かに引っかかったのだろう。

「お父さん。」

私は小さい声でつぶやいた。

言ったらまた何かなりそうで怖いけど。

正直に言い放った。

「そんなわけないじゃない。私の大切な大切な大事な子供よ。」

そうお母さんは言って、私のことを抱きしめてくれた。

お母さんの体はあたたかくてすごい久しぶりな香りを感じた。

心が何かを取り戻した感覚になった。

「ちゃんと、話すわ。私とお父さんは最初は友達だったの。でもある日、急に気持ち悪くなって、はいちゃっって。あまりにもいきなりだったからおかしいってことになって病院に行ったら子供ができていてね。その子供は誰の子？ってなって。そしたら、お父さんとの子供だったの。お父さんは最初は結婚なんてするつもりじゃなかったのよ。でも、あなたができたからって結婚したの。」

お母さんは苦しそうに話してくれた。

やっとわかった真相。

毎日の喧嘩の種。

「そう…だったんだ。」

私は落ち込んだ。

私のせいで、お母さんとお父さんは喧嘩をするはめになってしまったから。

気持ちが重くなるのを感じた。

「でも、決して、あなたがいなかったほうがよかったってなったら。私が今頃どうなってたのかしら。あなたが私を救ってくれたのよ？杏。大事な大事な私の娘。」

お母さんはそう言って優しく抱きしめてくれた。

私の心にフワッとあたたかい風がふいたような気がした。

優しくて綺麗であたたかい風が。

「お母さん。」

私は泣きながらつぶやいた。

私を必要としてくれたお母さんや剣や、いろんな人に私は感謝の気持ちを抱いた。

「剣君もありがとう。あの時もありがとね。でも、あんまりカッコイイこと言うもんだからびっくりしちゃった。」

お母さんは剣に向かって笑っていた。

ん？

カッコイイことって何？

私は剣のほうを見つめた。

「そ、それは。」

剣はあわてながら言い放った。

明らかに焦っている顔。

なんだろう？

私は首を傾げた。

「いいじゃない。もう付き合ってるんでしょ。」

お母さんにはお見通しだったみたいで。

その時のことを話し始めた。

「小さい頃に木登りして落ちたときあったでしょ？」

あ、そんなことがあったような気がする。

私は思い出しながら…

「うん。」

力強くうなずいた。

ちょうど最近に夢を見た気がする。

「そのときに杏が骨折してね。もしかしたら痕が残るかもしれないって言われてね。私が着替えの服を持ってこようと帰ろうとしたと

きに病院の出入り口に剣君が立っててね。いきなり「もし、痕に残ることになっても、俺が責任をとります。」って言ってね。すごいなーって感心しちゃったわよ。でも、それが今になってこうだから安心したわ。これからも仲良くお幸せにね。悪魔でも私達みたいにはならないでちょうだいね。」

お母さんは笑ってそう言ってくれた。

でも、微かに寂しそうだった。

「ありがとうございます。」

剣は深くお辞儀をした。

その姿はすごく凛々しくて、カッコイイと私が感心してしまった。

「結婚式が楽しみだわ。」

お母さんは楽しそうに言い放った。

え??!!

「お母さん??!!」

私は頬を赤らめながら言い放った。

そこまでまだ決まってないよ???!!!

私は驚いた。

「冗談よ。」

お母さんは意地悪な顔をしながら笑った。

お母さんと久しぶりに楽しく話した感じ。

すごくあたたかくて優しい気持ちになる。

・・・

ちょっと楽しみなんだ。

「緊張するよいくら家族同士で仲がいいからって。普通に言えるわけないだろ？なんて言えばいいんだよ。」

剣はため息をつきながらぼやいていた。

相当緊張してるみたい。

しょうがないなー。

・・・・・・・・・・

「私は娘さんを僕にくださいがいいなー。」

ねぇ、剣。

これからもずっと一緒にいてね。

大好きって気持ちを忘れずに。

剣。

大好きだよ。

終わり…

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6505g/

大好き

2010年12月5日14時49分発行